

特集

# 植込み型心臓デバイス治療の ニューノーマル



編集責任

埼玉医科大学 保健医療学部 臨床工学科

奥村高広 OKUMURA, Takahiro

本特集にて、「植込み型心臓デバイス治療の変遷」を松本万夫先生(埼玉医科大学国際医療センター 不整脈科, 東松山医師会病院 病院長)にご執筆を賜りましたことはたいへん光栄です。松本先生は、須賀幾先生(医療法人須賀医院 院長)、本誌2022年9月号でご執筆を賜りました加藤律史先生(埼玉医科大学国際医療センター 不整脈科 教授)とともに、私が臨床工学技士(CE)として埼玉医科大学病院に勤務していた時代において、1999年というまだ世間ではCEが不整脈治療へはほとんどかわれていなかった当時に、そのいろはからご教示いただきました。このような形ではありますが、またご一緒させていただけたことに厚く感謝申し上げます。

私のCE免許取得は1998年だが、専門学校時代の教科書を開いてみるとペースメーカは体外式についてがほとんどで、植込み式やプログラマブルといった用語がころうじて登場している。もちろん現在のCEの養成においては、国家試験科目「医用治療機器学」の重要な単位として扱われ、植込み型ペースメーカについてもさまざまな教本が利用でき、本誌でも多数取り上げられている。手前味噌で恐縮だが、埼玉医科大学臨床工学部門の監修による『動画と写真でまるわかり!ペースメーカ』が本出版社より絶賛発売中である。

しかし実際の医療現場は、従来の教科書を一新しなければならないほど植込み型心臓デバイスは進化を遂げている。従来の教科書は徐脈治療のペースメーカ主体の内容で、植込み型除細動器(ICD)でさえも新たなデバイスのような紹介にとどまり、心臓再同期療法(CRT)はなおさらでTips的に扱われている。

そこで今回、すでにはるかに進歩を遂げた技術の恩恵を患者が受けている現状を踏まえ、従来の教科書に新たなページを提供するというモチベーションで、「植込み型心臓デバイス治療のニューノーマル」と題した特集とした。

執筆者は、この領域を牽引する臨床工学技士と次世代を担う臨床工学技士として、埼玉医科大学を卒業し埼玉医科大学国際医療センターで活躍する私の教え子に推薦をお願いした。もちろん本人にも執筆いただいた。

また、植込み型デバイス治療は循環器のみではなく、脳・神経領域でも発展していることから、特集関連記事で埼玉医科大学病院脳神経外科の小林正人先生にもご執筆いただいた。小林先生に厚く感謝申し上げます。また今後、この分野がより発展し、特集号が組まれることも期待したい。

最後に、本特集で生体内植込み型デバイス治療の今昔、そしてニューノーマルを堪能いただければ幸いである。